オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

オプション教材ハギ　読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

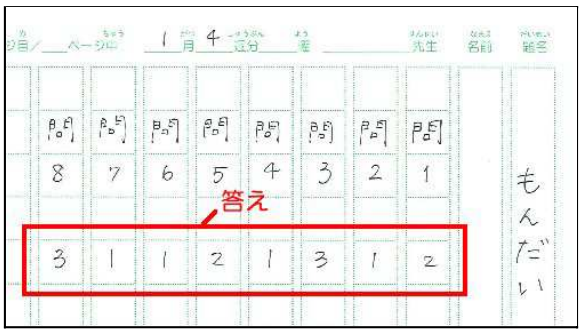
読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

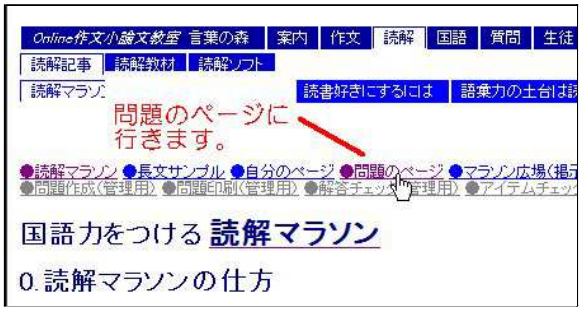
読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

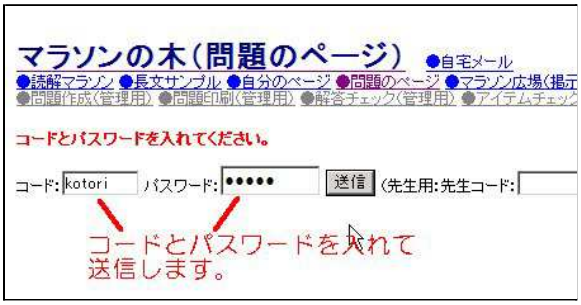


▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

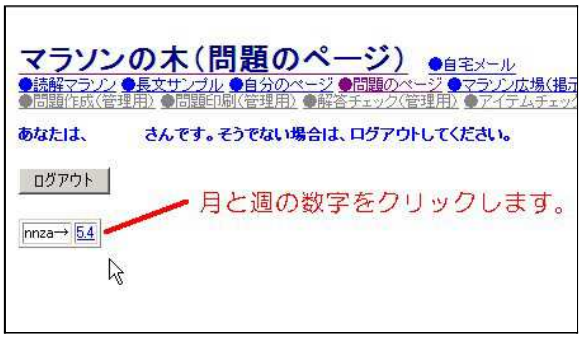
1.



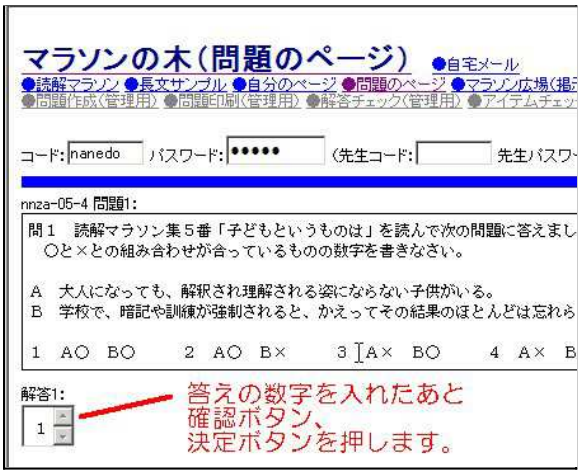
2.



3.



4.



5.

地下鉄の路線図を考えてみよう。これは距離も方向もずいぶんゆがんだ、しかも地下鉄以外のことは何にも描かれていない地図だが、線路のつながり具合と、駅のならんでいる順序は正しく書かれているから、自分がこれからどういう駅を通過してゆくのか、どこで乗りかえたらよいかなどということはそれによってまちがいなくわかる。ゆがんでいても、地下鉄以外のことは何も書いてなくても、行く先についての不安をなくするという役目だけならば、この地図はりっぱに果たすのだ。

だが、われわれ人間は、そのときどきの目的を不安なく達しさえすればそれで満足しきってしまう存在ではない。目的地に着くと、今度はそれがどんなところか、まわりにどんなものがあって、自分がすでによく知っているところからどっちの方角にあたるのか、地下鉄以外の交通機関でも来られるのかどうか、などということを知りたくなるだろう。人間というのは、さしあたり必要な範囲よりももっともっと広い世界に対して、つねに好奇心と探究心と夢とをもち、また実際にまわりに対して働きかけて、自分の活躍舞台を次々にひろげていこうとする生物なのだ。

このような好奇心をみたし、夢を伸ばし、また働きかける手がかりとして使うためには、ゆがんだ地図や、限られたものしか描かれていない地図ではもはや間にあわず、もっとくわしくて、方角や距離の正確な地図がぜひ必要になる。

自分の置かれている位置じたいもまた、自分のすぐまわりだけよりも、その外側のより広い世界までがわかっているほうが、もっとしっかりつかめるはずだ。自分の家の中での自分の位置がわかっているだけでは、自分が町のどのへんにいるのかがわからないが、自分の家が町のどこにあるのかがわかれば、家よりもずっと広い世界である町の中で自分がどんな位置を占めているかがわかる。

というふうに、広い範囲を知れば知るほど、世界の中の自分の位置がはっきりしてきて、自分の立場がたしかなものになる。自分の位置をたしかめたいという内向きの欲求と、広い世界をさぐりたいという外向きの欲求とは、けっきょく同じことの二つの面でもあるのだ。だから、地下鉄の路線図によってわかる自分の位置は、ほんのさしあたってのものにすぎないので、それをほんとうに確実につかむためには、やはりもっとくわしく正確な地図がいることになる。

地図は、人間のこのような、内向きと外向きとの、たがいにからまりあった欲求にこたえるためにあるのだ、といってよいだろう。これらの欲求にこたえるために、地図はしだいに発達して、いまのように、広い範囲をおおい、しかも科学的にすぐれた地図がつくられるようになったのだ。

（堀淳一「地図はさそう」）

どんな生物のからだであっても、細胞という単位からできている。しかし、細胞は小さいものだから、ほとんど目には見えない。血液のなかにある赤血球や白血球も、細胞の一種である。その大きさは、約十ミクロン。ミクロンという単位は、一ミリの千分の一の長さである。それなら、細胞を約百個並べると、一ミリになる。ずいぶん、小さいものだということがわかるであろう。

細胞には、たくさんの種類がある。人間のからだでも、数百種類が分けられている。それぞれ大きさや形や働きが、少しずつ、あるいは大いに、違っているのである。

これだけ小さいもので、人間のからだができているとすると、人間のからだは、何個の細胞からできているのか。もちろん、全部数えた人はいない。ほぼこのくらいという見当でいえば、十兆の単位になるといわれる。

人間が見ることのできる、いちばん小さいものは、大きさにしてどのくらいか。

それはほぼ十分の一ミリと考えてよい。机の上をはっている、とても小さな虫、それでもたいていは一ミリを越える。だから、目に見えないほど小さな昆虫というのは、じつはいない。昆虫なら、いくら小さくても、十分の一ミリよりは、普通大きいのである。なぜなら、昆虫もまた、細胞からできているが、昆虫だからといって、細胞の大きさは、とくに小さくならないからである。それなら、ある程度の数の細胞を集めてできた生物は、細胞の大きさよりは、かなり大きくなるはずである。一辺が十ミクロンの長さの立方体になっている細胞があるとして、その細胞を千個集めると、一辺が百ミクロンの立方体ができる。これなら、肉眼で、やっと点として見える。

ところが、たとえ一匹の、点ほどの大きさの昆虫でも、昆虫である以上は、頭があり、足があり、えさをとり、動きまわり、子どもを生む。それなら皮膚も必要だし、筋肉もいるし、それを動かす神経もいる。そうしたものはすべて、皮膚細胞や筋肉細胞や神経細胞という、それぞれ違った種類の細胞の集まりだから、細胞の数がたくさん必要である。そう考えれば、いくら小さな虫でも、細胞の大きさよりは、ずっと大きくなければならない。それがわかるであろう。

細胞一個で生きている生物もある。アメーバやゾウリムシがそれだが、これは単細胞生物といって、人間や昆虫のような多細胞生物とは区別される。単細胞生物は、もちろん細胞の大きさ、つまり十ミクロン、あるいはたかだか、その十倍の大きさ程度までである。これではなかなか、目には見えないことになる。

（養老孟司「解剖学教室へようこそ」）

私の平生の仕事は読むこと、考えること、書くこと、話すことなどである。その中で「考えること」は、別にいつとは限っていない。どんな時どんな所ででも出来る。御飯を食べながらでも考えられる。満員電車の中でもよい。とくに夜寝床の中へはいってから考え出すと、だんだん頭がさえてきて、よい思いつきが浮かぶことが多い。翌朝目がさめてから思いかえしてみると、まったくつまらぬ考え違いに過ぎない場合もあるが、時には昼日中には到底思いもつかぬ新しい着想が含まれていて、それが仕事のきっかけになることもあるのである。

つぎに、「書くこと」というのに二通りある。一つの着想を数式で表現し、計算を進め、その結果を経験的事実と比較するというのが一つ。これは考えることの直接の延長であると見てよい。この意味の「書くこと」は一つの専門的な論文が出来上がることによって一応終結する。もう一つはある外部的な事情にせまられて特別に筆を執るという場合である。現に私がこの短文を書いているのもそれである。それはなかなか楽ではない。ことにそれが長篇になるにしたがって労苦は加わってくる。ましてそれをまとめて一冊の書物にするとなると大変である。

読書が人生の大きな喜びであるのに比例して、著作には苦しみがあるのである。そうして出来上がったものには、いつも不満足な点が多いのである。すくなくとも私自身に関する限り、本を世に出してあよかったと思ったことはない。出来上がった本を見ると、いつもいろいろな欠点が目について、いてもたってもいられない気持になるのである。しかしそれも結局は私自身の努力が足りなかったのだと反省せざるを得ないのである。

これを逆の面からいえば著作の労苦が多ければ多いだけ、それを読む人の楽しみが増すならば、労苦はじゅうぶんに償われているわけである。そう思うと、どんな短いものでもおろそかには出来ないことになる。しかし私どもにとっては、何といっても専門外のことを書くのは苦手である。また専門の範囲内でも、同じ問題の通俗的な解説をたびたびやらねばならぬのは苦痛である。それが多少なりとも科学の普及になると思えばこそである。

そこで私ども専門家にとっての今後の義務は、むしろ程度の高い本当の専門書の著作にあるのではなかろうかと思う。とくに現在のように、外国の書籍の輸入が杜絶している際には、質量ともに研究の典拠となるような書物が各分科にわたって刊行されることが望ましいのである。かようなものへの要望が強いのに比例して、それを書く人の労苦は多いであろう。それは到底片手間で出来ることではない。

ところが書物の執筆を依頼されるような人は、必ず他に多くの仕事を持っているのである。その上に同じような著作をあちらこちらから同時に頼まれて困る場合も多いのである。ここに真に良い専門の書の世に出難い理由があるのである。したがって真に価値ある専門書を多く世に出すには、第一に一人の著者に同じような著作を幾つも頼まないこと、第二には、著者が他の仕事から解放されて一つの著述の完成に専念し得る期間を持つことが必要であると思う。しかしそれはいいやすくして、なかなか行なわれ難いことであろう。

（湯川秀樹「読書と著作」）

「ばあちゃん、もう春は来とるんかな」
ヨウはかまどに薪をくべているるい婆さんに蒲団の中からちいさな顔だけを出して聞いた。るい婆さんはもやのたちこめる暗い土間の隅にしゃがんだままゆっくりとふりむいて、
「春の夢でも見たんかや」
と日焼けした顔から白い歯をのぞかせて言うと、こくりとうなずいた孫娘に、
「ああ、もうとっくに日向ッ原じゃ春の歌がはじまっとるぞ」
とうれしそうに笑いかけた。
ヨウはおおきな目をかがやかせて、蒲団を跳ね上げて立ち上がると、土間のサンダルをつっかけ寝間着のまま外へ走り出した。
「こらっ、顔を洗ってから行かんか」
背後で聞こえる、るい婆さんの声にヨウは首を横にふりながら、島の南西を見下ろせる裏手の段々畑までの畔道をかけ上がって行った。
昨日まではぬかるんでいた道をヨウは犬のように跳ねながら走る。イモ畑を越え蜜柑の木の下を抜けて、牛のモグがいる小屋の前にたどり着くと、ヨウは立ち止まって朝陽に光る海を見下ろした。
半月余り続いた雨が上がった瀬戸内海は無数の波頭が西へむかう鳥の群れのように踊っていた。ヨウは肩で息をしながらおおきな目を少しずつ下げて行く。海原にむかって突き出した皇子岬、左手にとんがり帽子のように頭を見せる岬の白い岩肌が草のひろがる緑にかわると、そこだけ円形のステージのように丸くなった草原、日向ッ原が見えた。
「モグ、見てごらんよ。春が来とるよ。日向ッ原に、いっぺんに春が来とるよ」
ヨウは大声で叫んだ。
日向ッ原はまるで花たちが一夜のうちに開花したかのように菜の花とれんげが一面に咲いていた。春風の織ったじゅうたんがヨウの目にあざやかに映った。
「やっぱり夢で見たとおりだよ、モグ」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ヨウはその場で飛び跳ねると、いつものように口をもぐもぐとさせているモグの首に抱きついた。モグは喉を鳴らしてから、ヨウの身体を釣り上げるように首を回した。
（伊集院静「機関車先生」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

私にとって、小学校五年生になるというのは恐怖だった。四年生まではぼーっとしていても何の問題もなかったのだが、五年生になるといろいろと面倒なことを背負わされるからだった。近所に住む、同じ小学校に通う子たちとの集団登校のときも、今までみたいに、ただ足をたがいちがいに出していればいい、というわけにはいかない。

「集団登校のときは下級生の面倒をみる」

これが五年生になった、小学生のさだめなのであった。五年生になったその日から、私は集団登校の副責任者。異様なくらいにおっとりした、六年生のタカシくんが先頭を歩いてみんなを引率し、五年生の私はいちばん最後を歩く。みんなに変わったことがないかを気にしつつ、毎日、登校しなければならなくなったのだ。

六年生と五年生にサンドウィッチされた下級生どもは、こちらの気も知らないで、わいわいいいながら勝手に歩いた。自分の前の子のランドセルをつかんで、前後左右に大きくゆすり、その子の首がカクカクするのを見て喜ぶ奴。道路わきのドブに、わざと片足をつっこんで、

「落ちる、落ちる」

とわめく奴。

（これから学校に行くっていうのに、何でこんなに元気なんだ、こいつ）

去年までだったら、こんな奴をみても、私はふふんと鼻でせせらわらってそっぽをむいていればよかった。しかし今年からは、ドブに片足をつっこむ奴には、

「ほら、ほら、ちゃんと歩いて」

と注意する。いちおうは、

「はあい」

と返事をするものの、三歩歩いたらまたドブに足をつっこんで、

「わあ、落ちる、落ちる」

とわめいていた。

「ほら、ちゃんとしてよ」

ちょっと声を荒げると、

「うるせえなあ、デブ」

などという。私は五年生になったとたん、だんだん体重がふえはじめ、顔も体もまん丸になってきたのだ。いちばん気にしているこ

とをいわれ、うんざりしながら前方を眺めていたら、突然、列が乱れた。二年生のシンジが転んだのだ。あわててかけ寄ると、シンジのすぐ後ろを歩いていた三年生のミチコが、

「あのね、あのね、シンジくんはね、後ろを向いて歩いていたんだよ。あたしがやめなさいっていったのに、後ろ向いてあっかんべえなんかやってたからね、石につまずいたんだよ」

と、たいした出来事でもないのに、興奮して目撃証言をした。

「ぴー」

彼は道路にはいつくばったまま、泣いていた。

「大丈夫？」

とりあえず私は声をかけた。

（このくらいのこと、平気だろ）

といいたかったが、私の立場ではそんなことはいってはいけないのだ。

「ぴー」

彼は道路につっぷしたまま、首を左右に振った。

「ほら、見せてごらん」

抱き起こしてふとシンジの顔をみると、左の鼻の穴から、練り歯磨きのチューブから絞りだしたような、太い鼻水がだらっと垂れていた。

（うわあ、きたない）

こんな奴の面倒をみるのは嫌だったが、五年生の私はそんなことをいってはいけないのだ。膝のケガはたいしたことはなかったが、あまりにシンジが、

「痛い、痛い」

といってぴーぴー泣くので、タカシくんは私に、

「保健室に連れていったほうがいいかもしれない」

とぼそっといった。

（あーあ）

私はわからないようにため息をつき、まだぴーぴー泣いているシンジの手をひいて、みんなより先に学校に急いだ。

（群ようこ「膝小僧の神様」）

善太がお使いから帰って来ると、げんかんに子どものくつと女の下駄がぬいであった。
「三平らしいぞ。」
思わず微笑がほおにのぼってくる。それでもまじめくさって、
「ただ今。」
と、上にあがって行く。座敷で、おかあさんと鵜飼のおばさんとが話している。おじぎをしてそばにすわる。「三平ちゃんは？」と聞きたいのだけれど、なぜか、その言葉が出てこない。立ってその辺を歩いてみる。茶の間にも、台所にも、奥の間にもいない。げんかんの帽子掛けにチャンと三平の帽子があり、その下に背おいカバンも置いてある。聞かなくても、三平は帰っている。こんどは外へ出てみる。柿の木の下へ行ってみると、そこにおかあさんの大きな下駄がぬいである。三平がのぼっているのである。善太ものぼって行った。木の上でふたりは顔を合わせた。ニコニコして見合ったのであるが、言葉が出てこない。一週間ばかりしか別れていないのに、ふたりとも少しばかりはずかしい。三平ちゃんともいいにくいし、にいちゃんとも呼びにくい。まして、三平が夢の中で子捕りにとられて、自分が泣いたなんてことはいおうにもいわれない。三平とて同じである。しかしいつまでもニコニコしあっているわけにもいかない。三平は木をすべりはじめた。巧みにすべるのである。五、六日でそんなにもじょうずになっている。無言で、そのじょうずなところを三平はやってみせた。善太もそれにおとらず、じょうずにすべりおりた。善太がおりると、三平は登りはじめた。登るのもじょうずである。二、三度この木登り競技をやって、ふたりとも下におり立った時、善太が思い切って呼んだ。
「やい、三平。」
「何だい。」
この声と共に、ふたりは取り組んだのである。うれしさ、はずかしさのやり場はこれ以外になかった。
「何だい、弱いじゃないか。」
善太がいってみる。
「ナニッ。」
三平は顔を真っ赤にして、手足に力を入れた。

「そうか、少し強くなったかな。」
「強いさあ。」
三平はメチャクチャに力を出すのである。ウーム、ウームとうなって押すのである。前からあった押し出し相撲の丸の中から、善太はとっくに押し出されていた。
「こりゃ強いぞ。」
善太がいうと、三平はますます押して来る。
「負けた。負けたよ。」
そういっても、三平は押し手をゆるめない。
「オイ、にいちゃんが負けたんだよ。」
「なあにィ。」
とうとう善太は垣根の檜のところまで押しまくられ、檜の枝葉の中に押しつけられた。
「降参、降参。三平ちゃん、ぼくの鉛筆やるからなあ。」
それでやっと三平の手をはなしてもらった。

（坪田譲治「風の中の子供」）

読解マラソン集　７番　針葉樹は現在、世界中に　ha3

針葉樹は現在、世界中に五六〇種ほど知られており、多様化という意味でも、植物進化のうえでの成功者といえるグループである。それに対して、世界各地で化石が多く出土することから、かつて地球上にかなり広く分布していたと推測されるイチョウの仲間は、今では分布域がいちじるしく限定され、現存種はイチョウ一種だけである。

繁栄を続けた針葉樹と衰退の一途をたどったイチョウ類。ここ数百万年間の植物界での交代劇の主役たちの命運をわけたのは、針葉樹が進化させた松脂だったのではないかと推測されている。針葉樹は、松脂という非常に効果的な防御物質を進化させることによって、食害を効果的に回避することができるようになったのである。

虫に食べられてしまうのを防ぐことができれば、厳しい環境で成長が抑制されたとしても、光合成で稼いだものを少しずつ蓄積しながら、時間をかけてゆっくりと成長していくことができる。それに対して松脂を発明するという適応進化をなしえなかったイチョウは、食害に苦しんだ結果、樹木進化の主役の座を降りなければならなかった。そして、大気汚染に強いことにあらわれているような別の面でのストレス耐性を獲得したイチョウ一種だけを残して絶滅してしまった。

はてしない適応進化の一断面として、現在にその姿を伝えている生物は、その一種一種が、地球および地域の地史と生命史の産物として、かけがえのない歴史的存在であるといえる。

（鷲谷いづみ「生態系を蘇らせる」）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ぼくの小さいころは、買い物をするのに定価のないことが多かった。店の人と世間話から始まって、値切るやりとりがあった。そして、自分が値をきめたような気分が少しはあって、その値段にチョッピリ自分の責任があった。

もちろん、ドジだと高く買わされる。要領のよいのがトクをする。同じものを買うのに、高く買うのもあれば、安く買うのもいる。まったく、「不平等」だった。

このごろでは、共同購入などと、代表者にまかせるのまである。そのかわり、みんなが同じ値段で買う。国家と生命の売買をやるのだって、代表者にまかせて、みんなが同じ値段でやるのじゃないかと、時節がら少々不安である。

ドジを重ねて、要領をおぼえたものだ。それで、ある日急に買い物上手になったりもする。店との相性もあるもので、気に入りの店だと安く買えたりする。なじみがいもあった。ドジが固定するものでもないし、ある店ではドジでも、別の店では要領よくナジミになったりもした。

いつでもドジだと困るかというと、そうした人間は、店のほうからまけてくれた。ドジにつけこんで、いつももうけていたのでは、店の評判も落ちるのだった。

そして、要領のよい子を相手にとなると、店のほうでもなかなかシブトイ。値切り合戦というのは、ゲームでもあった。そしてそこには、ヤヤコシイ人間関係があった。

若い人に聞くと、そんなのメンドクサイ、と言う。金を出して物を手に入れる、それだけならば、だれでも同じ値段で物が手に入るのが「平等」だ。その極端なのは、自動販売機で、機械にお世辞を言っても、まけてくれない。

しかしぼくは、要領のいいのやドジなのや、さまざまに混じりあって、店も客もさまざまに気を使いあう世の中が、よい世の中だと思う。

校則だって、守る生徒やら守らない生徒があって、うるさい教師や甘い教師があって、そのなかで叱られたり逃げたり、そのほうが気持ちがよい。このごろの「非行生」の文句に、「他の人間もやってるのに、自分が叱られるのは不公平」というのがある。これは、「非行」それ自体よりも、人間社会にとってよほど危機ではないか。

自分がドジで叱られようが、要領のよい仲間が叱られずにすむことは、喜ぶべきことであるはずだ。「不公平」というのは、ヤッカミ根性のことかもしれぬ。

問題は自分だけのことだ。他人が叱られようが叱られまいが、どうでもよいことだ。今はドジでも、今度はうまくやればよい。こういうのこそ、「自立してない」と言うんだろうな。せめて「非行生」だけでも自立してほしい。「優等生」が自立してないことは、大学生を相手であきらめてるんだから。

（森毅「ひとりで渡ればあぶなくない」）

男の子が生まれて一番嬉しいと思ったのはこのプロレスごっこをはじめとした乱闘あそびができることだ、と私はいつかかなり真剣な顔をして妻に言ったことがある。（中略）岳が二、三歳の頃はまだ彼はプロレスやボクシングというものをよくわからず、抗争は「ウルトラマン対怪獣」という図式になっていた。岳はいつも正義の使者であり、私は宇宙の暗闇からやってきて平和な地球を滅ぼそうとする悪の怪獣という役回りだった。

岳はこれを「たたかい」と呼んでいた。保育園から帰ってくると「おとう、たたかいしようぜ」と早くも正義の使者の顔つきになって闘争を仕掛けてくるのだ。

「たたかい」が「勝負」に変ったのは岳が三年生になってからだった。

それはいつもやられ役だった私がその頃から意図的に時おりこっぴどく彼を痛めつけるようにしたからのようであった。サッカーをはじめた岳の体がしだいに強健になり、すこしぐらい手荒に投げつけても大丈夫、ということがわかってきてから私自身もふざけ半分ではなく本格的に力を込めてたたかうようにした。（中略）

岳と私の勝負がさらに過激になっていったのは私がパタゴニアの旅から帰ってきてからだった。パタゴニアの旅は氷河の海を航海し、あとはパンパという大草原を動き回っているだけだったので、岳への土産は何もなかった。そこでチリの一番南の端にあるプンタアレナスという町で私は岳のためのおみやげを制作したのだ。プンタアレナスは小さな港町で港湾用品や金物屋ぐらいしか店がなかった。（中略）そこで風呂の流しの金物や真鍮製の円盤、自動車用のコンドルの飾り物などを買ってきて、ホテルの部屋にとじこもり、それでプロレスのチャンピオン・ベルトの飾りものを作ったのだ。（中略）

私は家に帰り、そのベルトを岳に見せ、ただでやるわけにはいかないぞ、と言った。おれと闘ってピンフォールで勝ったらこのベルトをやろう、と言ったのだ。その晩の闘いは私と岳の闘争史の中でも一、二を争うようなベストマッチとなった。

二十分の死闘の中で、私は岳の足腰がしばらく会わないうちにさらにまた強靭になり、蹴りやパンチのひとつひとつの威力がずんずんと恐ろしいほどに効くようになっているのを知った。そしてうしろ回し蹴りという凄じい技をなかばまともにくらって倒れ、ピンフォールされた。まだ私は全力ではやっていなかったが、今日は自分のもっている力の六割ぐらいをきっちり出してやつに負けたな、と畳の上にあおむけになったまま思った。

そして岳はその頃から学校での喧嘩ランキングを不動の第一位にしていったようであった。五年生になると学年だけでなく全校でやつが一番強いらしい、という話を岳の仲間の何人からか耳にするようになった。

そうだろうな、と私は思った。衰えつつあるとはいえ体重七十二キロ、身長一七六センチ、柔道弐段の私をかなり手こずらせるようになっているのである。あいつが本気で怒ったらいまのひょろひょろの六年生などまずかなうまい、と思った。岳のそういう、良いか悪いかわからないけれど、まあそれはそれでひとつの「能力」のようなものを、私はかなり意識的に彼の幼児の頃から「たたかい」という遊びを通してじっくり着実に育ててきたような気がするのだ。（中略）

私はそんなふうに、「たたかい」の世界を岳におしえてきたかわりに、その分だけ勉強というのを一切おしえなかった。「勉強しろ」とも言わなかった。そして彼はそちらの方も着実にあからさまにその成果をあらわにしているのだった。「子供にかまいすぎるとどっちにしても失敗するのさ」とクールに言っていた沢野の顔が私の目の前にまたぼんやり浮かんできた。

（椎名誠「続岳物語」）

二年前、私は妹をお供につけて母に五泊六日の香港旅行に行ってもらった。

「死んだお父さんに怒られる」とか「冥利が悪い」と抵抗したが、もともとおいしいもの好きで、年にしては好奇心も旺盛な人だから、追い出してさえしまえばあとは喜ぶと判っていたので、けんか腰の出発だった。

空港で機内持ち込みの荷物の改めがある。私は、母と妹が係官の前でバッグの口をあけているのをプラスチックの境越しに見ていた。

「ナイフとか危険なものは入っていませんね」

係官が型の如くたずねている。私は当然「ハイ」という答を予期したのだが、母は、ごく当り前の声で、

「いいえ持っております」

私も妹もハッとなった。

母は、大型の裁ちばさみを出した。

私は大声でどなってしまった。

「お母さん、なんでそんなものを持ってきたの」

母は私へとも係官へともつかず、

「一週間ですから爪が伸びるといけないと思いまして」

係官は笑いながら「どうぞ」といって下すったが、私は、中の待合室でなぜ爪切りを持ってこなかったのと叱言をいった。

「出掛けに気がついたんだけど、爪切り探すのも気ぜわしいと思って」

言いわけをしながら「お父さん生きてたら、叱られてたねえ」とさすがに母もしょんぼりしている。（中略）

祖母が亡くなったのは、戦争が激しくなるすぐ前のことだから、三十五年前だろうか。私が女学校二年の時だった。

通夜の晩、突然玄関の方にざわめきが起った。

「社長がお見えになった」

という声がした。

祖母の棺のそばに坐っていた父が、客を蹴散らすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき入ってきた初老の人にお辞儀をした。

それはお辞儀というより平伏といった方がよかった。当時すでにガソリンは統制されており、民間人は車の使用も思うにまかせなかった。財閥系のかなり大きな会社で、当時父は一介の課長に過ぎなかったから、社長自ら通夜にみえることは予想していなかったのだろう。

それにしても、初めて見る父の姿であった。

物心ついた時から父は威張っていた。家族をどなり自分の母親にも高声を立てる人であった。地方支店長という肩書もあり、床柱を背にして上座に坐る父しか見たことがなかった。それが卑屈とも思えるお辞儀をしているのである。

私は、父の暴君振りを嫌だなと思っていた。

母には指環ひとつ買うことをしないのに、なぜ自分だけパリッと糊の利いた白麻の背広で会社へゆくのか。部下が訪ねてくると、分不相応と思えるほどもてなすのか。私達姉弟がはしかになろうと百日咳になろうとおかまいなしで、一日の遅刻欠勤もなしに出かけていくのか。

高等小学校卒業の学力で給仕から入って誰の引き立てもなしに会社始まって以来といわれる昇進をした理由を見たように思った。私は亡くなった祖母とは同じ部屋に起き伏した時期もあったのだが、肝心の葬式の悲しみはどこかにけし飛んで、父のお辞儀の姿だけが目に残った。私達に見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。父だけ夜のおかずが一品多いことも、保険契約の成績が思うにまかせない締切の時期に、八つ当りの感じで飛んできた拳骨をも許そうと思った。私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。

（向田邦子「お辞儀」）

自分らしさ、っていったい何なのだろうか。その人らしさ、個性、とは、どのようにしてできあがるものなのだろう。自分らしさは自分でだんだん外側へつくりだしていくもの、という考え方や感じ方があるようだ。ちょうど、雪だるまをつくるときのように、新しいものをだんだん外側へくっつけて、自分をふくらませていくというイメージだ。

しかし私は、自分らしさとか個性というものをそのようなイメージでとらえてはいない。それは、自分でつくり出すものではあるけれど、同時に自分で自分の内側を発見していくものなのだと思っている。自分の中には、はじめから自分らしさがちゃんと備わっている。その自分の声に耳を澄ませながら、自分らしさを見つけだしてゆくことが、自分を探す旅であり、自分の人生を生きるということなのではないだろうか。

そのイメージは、雪だるまをつくるようなものではないとすれば、むしろ果物の実がふくらみ、熟れてゆくありさまに似ている。外側へふくらみつつ、内側に備わった自分の味を実らせてゆく。りんごはりんごの、桃は桃の味を、たしかに見いだして、内側を充実させてゆく。外側への広がりと、内側の実りが、果実の成熟である。

りんごはりんごの、桃は桃の味、と言った。すみれはすみれの、マーガレットはマーガレットの花の色、と言ってもよい。決してひとは生まれたときは白紙ではないし、成長とともに環境によって染められるだけのものではない。

ところが、ひとは生まれたときは白紙で、そこには何でも書きこめるし、自由に作れるという考え方がある。たとえば、ある心理学者は、「わたしにひとりの正常な赤ん坊を与えてくれて、しかも環境を自由に操作することを許してくれたなら、その子をどんな人間にもしてみせるし、どんな職業にもつかせてみせる」という意味のことを言った。人間をどのようにもつくれるという考え方をとらない心理学者もいるけれども、しかしさきにひいた言葉のように、ひとは環境をととのえればどんなふうにも自由につくれるという考え方は、いまの世の中にかなり根づよくはびこっている。けれども私は、その考え方は誤りだと思っているし、むしろ危険な考え方だと思っている。それとは逆に、「子どもは白紙ではなく、一冊の本である」といった人がいる。その本を、大人は心をこめて読んでいこう、というのである。この考え方の方が私はずっと好きだ。その私の考え方や感じ方は、私が太郎と次郎というふたりの子どもと長いことつきあってくる中で、しだいにはっきりとしてきたものだ。また、子どもたちについてだけでなく、自分自身というものについても、だんだん明確な考え方がもてるようになってきたといえる。

子どもを育てながら、母親たちはいろいろなおしゃべりをする。その中にしょっちゅう登場する次のような話題がある。それは、「同じ両親から生まれて、同じように育てているつもりなのに、きょうだいでもぜんぜん違うわねえ」というような言葉である。「そうね、だから子どもを育ててると面白いのねえ」などと話は続いていく。

あなたに、もしきょうだいがいたら、やっぱり自分ときょうだいのことをそう思うのではないだろうか。同じ親から生まれ、同じ家庭で育っても、ひとりひとりはおもしろいほど違う。長子と次子のちがいだとか、ひとりっ子の性格だとか、環境論をとなえる人々は言う。けれど、どうもそれでは説明のつかない色あいの違い、持ち味の違いのようなものが、ひとりひとりの核にあるというのが、子どもとよくつきあったことのある人の実感なのだと思う。

（小澤牧子「自分らしく生きる」）

今年の秋、ウィーンの楽友協会ホールで武満徹さんの新作クラリネット・コンチェルトがウィーン・フィルハーモニーによって演奏される。二百年前、モーツァルトのクラリネット・コンチェルトがウィーンで初演奏されたのを記念する催しで、百年前には同じ趣旨でブラームスがクラリネット五重奏を作曲していることを考えると、これは日本の音楽界だけでなく日本にとって大きな出来事だと思う。おそらくわが国の文化芸術の分野でこれに匹敵することはかつてなかったし、今後もそうそうあることではなかろう。（中略）

製紙会社の会長と作曲家武満とのかかわり合いを不思議に思われる方もあると思うが、家内同士が学校時代からの親友で、武満さんが二十歳を過ぎたころから家族ぐるみのお付き合いをしてもう四十年にもなろうとする。だからといって私は彼の音楽をいっこうに理解するものではないが、今回世界の存在とまでなった武満さんの人生の来し方を眺め続けてきた者として、その人間的バックグラウンドを語ってみたい。

何よりもまず自分の道を自分のやり方で歩いてきた人である。作曲家としても徒手空拳、自ら一家をなしたので、音楽学校へいったわけでも特定の師についたのでもない。本当に才能のある人は既成概念で教育など授けないほうがよほど純粋に成長できるという真理を彼もまたわれわれに示してくれた。大江健三郎との共著「オペラをつくる」の中で彼はこういっている。

「ぼく自身が音楽家としての四十年、音を表現媒体として、自分でしか言い表せないようなことを表す。……音楽といってもその表現のスタイル、形式は多様で、たんに慰めや娯楽のための音楽であれば、時代の人たちが喜ぶような表現方法はあるように思います。しかし、ぼくがやっている音楽はそういうものでなくて、音というものを通して人間の実在について考える。どちらかというと、詩とか哲学とか、そうしたものに近い表現形式として音楽をやっているわけで、これがいちばんむずかしいところなんですね」

創造性と個性、いまの日本人にこれほど求められているものはない。

武満さんはまた世界人であると同時にすぐれて日本人である。彼の作風からもこのことはよくうかがえる。代表作であるノヴェンバー・ステップスには和楽器である琵琶と尺八が取り入れられ、本来西洋のものであるコンチェルトに日本の音色を植えつけたことはあまりにも有名である。前述の本の中で彼はまた、「僕の音は西洋音楽の音とはまったく違う」とも述べている。彼の音楽は西洋の亜流ではないようだ。そこが世界の注目をひき絶賛を博しているのだと思う。（中略）

ややしかつめらしいことを書いてきたが、多くの人々が武満さんにひかれるのは、根っからの市井人である一面であろう。立派なサイレント・マジョリティの一員、卑近な言い方をすれば熊さん、八つぁん的要素である。熱狂的な阪神タイガースファンでシーズンになると外出先でもラジオを離さず一喜一憂している。まさに日本人の判官びいきを絵に描いたようなものである。

私は彼の背広姿をほとんどみたことがない。普通はズボンにセーター、改まったときは、ネクタイなしだが独特のスタイルのジャケットを着用している。最近、だれのデザインですかと聞いたら、これは森英恵さんですと答えた。これで日本はおろか世界中を通している。私はひそかに浴衣がけの外交と呼んでいる。あのとても頑丈とはいえない肉体で年に何回となく外国に出かけるエネルギーは聡明で献身的な奥さん、才気煥発のお嬢さん、そして猫二匹という恵まれた家庭のたまもので、これは彼の最大の作品かもしれない。市井人の常識が申し分なく働いている。ここにもいまの日本人がともすればないがしろにしがちなものがある。

武満徹論を最後に締めくくれば、世界への道の前に日本の道があり、日本への道の前にわが道があったということであろうか。そして平凡の中に非凡があることがなんとも魅力的である。

（河毛二郎「逆風順風」）

読解問題 4月4週分

問1　読解マラソン集1番「地下鉄の路線図を」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A　人間は、さしあたり必要な範囲(はんい)の目的が達成されれば、それで満足できる存在(そんざい)である。

B　人間は、好奇心(こうき)があるので、方角や距離(きょり)の正確な地図を求めるようになる。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集1番「地下鉄の路線図を」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　人間は、自分のすぐまわりの世界だけでなく、外側のより広い世界も知りたがる。

B　地下鉄の路線図では、正確な方角や距離(きょり)はわからない。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集2番「どんな生物のからだであっても」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　赤血球(せきけっきゅう)や白血球(はくけっきゅう)は小さいので、ほとんど目に見えない。
B　細胞(さいぼう)は、百個並(ならべ)べても、まだ人間の目で見ることは難(むずか)しい。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集2番「どんな生物のからだであっても」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　小さい昆虫(こんちゅう)は、人間よりも小さい細胞(さいぼう)で作られている。

B　アメーバやゾウリムシも、いくつかの細胞(さいぼう)でできている。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集3番「私(わたし)の平生の仕事は読むこと」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　私(わたし)は、いつでもどこでも考えることができる。

B　著作(ちょさく)には苦しみがある分、出来上がったあとの満足感も多い。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集3番「私(わたし)の平生の仕事は読むこと」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　読む人が喜んでくれれば、書く人の苦労は報われている。

B　一人の著者(ちょしゃ)に同じような本を何冊(さつ)も書かせるので、良い専門書(せんもんしょ)が世に出にくい。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集4番「ばあちゃん、もう春は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　るい婆(ばあ)さんは、一日中暗い土間の隅(すみ)にしゃがんで仕事をしている。

B　ヨウの家は、海を見下ろせる段々畑(だんだんばたけ)の上の方にある。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集4番「ばあちゃん、もう春は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　モグというのは、ヨウと仲よしのかわいい子牛(こうし)である。

B　春風の織ったじゅうたんとは、日向ッ原に咲(さ)いている花々の様子を表した表現である。
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 5月4週分

問１　読解マラソン集５番「私(わたし)にとって、小学校五年生になるというのは」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　私(わたし)の小学校では、六年生が少ないので、五年生も集団登校の副責任者になっていた

Ｂ　去年までの私(わたし)は、下級生と同じようにふざけたりいたずらをしたりしながら登校していた

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集５番「私(わたし)にとって、小学校五年生になるというのは」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　私(わたし)は、シンジのケガに同情しなかった

Ｂ　保健室に連れていくのは、本当はタカシくんの仕事だった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集６番「善太(ぜんた)がお使いから帰って来ると」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　善太(ぜんた)と三平は、仲のいい兄弟だった

Ｂ　柿(かき)の木(き)の下にぬいであったのは、三平のお母さんの下駄(げた)だった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集６番「善太(ぜんた)がお使いから帰って来ると」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　善太(ぜんた)は、三平と初(お)めて押(お)し出(だ)し相撲(すもう)をし、三平の強さに驚(おどろ)いた

Ｂ　善太(ぜんた)は、三平に押(お)し出(だ)されても、すぐには負(ま)けを認(みと)めなかった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集７番「針葉樹(しんようじゅ)は現在、世界中に」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　針葉樹(しんようじゅ)の仲間の中で、イチョウだけは次第に衰退(すいたい)していった

Ｂ　イチョウは、松脂(まつやに)を出さないので、害虫に弱かった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集７番「針葉樹(しんようじゅ)は現在、世界中に」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　針葉樹(しんようじゅ)は、虫に強いものが多いので、繁栄(はんえい)した

Ｂ　イチョウは、虫には弱いが、大気汚染(おせん)には強かった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集８番「ぼくの小さいころは」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　値切(ねぎ)る買い方では、要領のよいのはトクをし、要領の悪いのは損をする

Ｂ　ドジな人でも、安く買えることがある

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集８番「ぼくの小さいころは」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　自動販売機(はんばい)の値段(ねだん)は公平だから、ヤヤコシイ人間関係は必要ない

Ｂ　同じことをして叱(しか)られる人と叱(しか)られない人がいるのは、不公平でよくない

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

読解問題 6月4週分

問１　読解マラソン集９番「男の子が生まれて」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　岳との「たたかい」で、私もたまに正義の役をやることがあった

Ｂ　「たたかい」が「勝負」に変わったのは、私がだんだん本気でたたかうようにしたからだ

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集９番「男の子が生まれて」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　岳は、チャンピオン・ベルトがかかっている勝負で、本気になってたたかってきた

Ｂ　岳は、喧嘩が強いばかりでなく、勉強もまたよくできた

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集１０番「二年前、私は妹をお供につけて」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　母は、気が進まなかったようだが、私は敢えて母を香港旅行に行かせた

Ｂ　私は、爪切りぐらい現地で買えばいいと思った

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集１０番「二年前、私は妹をお供につけて」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　父は、財閥系の大きな会社に品物を納める会社の課長をしていた

Ｂ　父は、家庭ではいつもいばっていたが、仕事がうまく行かないと卑屈になることもあった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集１１番「自分らしさ、っていったい」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　自分らしさは、つくりだすものではなく、発見するものだ

Ｂ　ひとは、生まれたときから、自分らしさを備えている

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集１１番「自分らしさ、っていったい」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　人間は、環境次第でどんなふうにでも自由に変えることができる

Ｂ　子どもは、一冊の本のようなものだから何でも書き込んでいくことができる

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集１２番「今年の秋、ウィーンの楽友協会ホールで」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　武満徹は、みんながよろこぶような音楽を作りたいと思っているわけではない

Ｂ　私は、武満徹と、子供時代から仲がよかった

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集１２番「今年の秋、ウィーンの楽友協会ホールで」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

Ａ　武満徹は、西洋の音楽に、日本的な音を付け加えた

Ｂ　武満徹は、芸術家だが、普通の人と同じような趣味や常識も持っている

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

４ ～ ６ 月

小１　コード：nane　パス：	小２　コード：nane　パス：	小３　コード：nane　パス：
小４　コード：nane　パス：	小５　コード：nane　パス：	小６　コード：nane　パス：
中１　コード：nane　パス：	中２　コード：nane　パス：	中３　コード：nane　パス：
高１　コード：nane　パス：	高２　コード：nane　パス：	高３　コード：nane　パス：

１ ～ ３ 月

小１　コード：nane　パス	小２　コード：nane　パス	小３　コード：nane　パス

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
小４ コード：nane パス： PDF	小５ コード：nane パス： PDF	小６ コード：nane パス： PDF
中１ コード：nane パス： PDF	中２ コード：nane パス： PDF	中３ コード：nane パス： PDF
高１ コード：nane パス： PDF	高２ コード：nane パス： PDF	高３ コード：nane パス： PDF